

	3月	4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月	
旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬															



品種の特徴

早晚性	晩の中
耐倒伏性	やや弱
障害型耐冷性	極強
いもち抵抗性(葉)	やや弱
〃 (穂)	中
草型	偏穂数
穂発芽性	難
品質	上の中
食味	上の中

茎数の推移

最高分けつ期茎数 790本/m²

期待生育目標

出穂期	8月12日頃
成熟期	10月1日頃
稈長(cm)	78~81
穂長(cm)	18
穂数(本/m ²)	480~520
玄米収量(kg/10a)	540
玄米千重量(g)	22~23

水管理

田植え後2~3日は、活着するまで深水とする。また、除草剤散布後3日間は水を切らさないようにする。活着後、好天時は浅水で地温を上昇させ分けつ発生を促進する。低温の恐れがある場合は、深水とする。

分けつ期にカナ、表層はく離が多い場合は朝夕の短時間で水の入れ替えを行う。

幼穂形成期は深水とし、低温が予報された場合は、足し水で水深10cm以上を確保する。減数分裂期は少しでも低温が予想される場合は引き続き深水とし、17℃以下の異常低温時は15cm以上の深水とする。

出穂期以降の高温時は、玄米の急激な肥大や白粒の発生を防ぐため用水の状況から可能な場合はかけ流し等により強制登熟を防止する。

播種量 中苗 100~120g/箱(乾籾) 3.5葉以上の健苗

育苗管理 5℃以下の低温、30℃以上の高温としない。かん水は、1日1回たっぷりとする。

栽植密度 60~70株/坪 3~4本/株植え

6月下旬の目標茎数 1株あたり27~30本

刈り取り適期 黄化籾割合 80% 積算気温 900~1,050℃

中干し 目標茎数を確保したら中干しを開始する。田に小さな亀裂が入る程度に7~10日間乾燥させる。

作業体系

浸種 p.19 → 催芽・播種 p.19-20 → 育苗 p.20-27 (耕起・代かき p.16) → 移植 p.29 → 雑草防除 p.30-34 → 中干し p.35 → 追肥 p.39-40 → 穂いもち防除 p.41 → カメムシ防除 p.42-44 → 落水 → 収穫調整 乾燥製量 p.45-47

※田植え後の取り置き苗は早期処分する口

浸種

水温	日数	積算温度
12~15℃	10~8日	120℃

※注意! 最初の水浸け温度を10℃以下で始めると出芽率が低下します。必ず10℃以上の水温を確保してから浸種しましょう!

耕起 耕深 15cm以上

代かき 凸凹がないように丁寧にやる

いもち防除の例 育苗箱施用剤 → 取置き苗の早期処分 → 穂いもち予防剤散布 7月中~下旬

※圃場抵抗性は葉いもち・穂いもちともに不十分であるため粒剤等を施用して予防に努めるとともに、早期発見を心掛け、適切な防除を行う。

カメムシ防除の例 畦畔管理 → 出穂2週間前の一斉草刈り 7月下旬 → 薬剤防除 1回目 出穂期 2回目 1回目散布1週間後 → イネ科雑草の出穂が多い場合は畦畔草刈りを実施

※薬剤の使用方法について 水稲使用農薬の使用については、各作業項目に記載されている「うるる米づくり」のページをご覧ください。

乾燥製量目 仕上げ水分 15.0% ふるい目 1.9mm 紙袋 皆掛重量 30.5kg フレコン 正味重量 1,089kg

秋耕起 p.48 土壌微生物の活動が盛んな(地温15℃以上)うちに収穫後できるだけ早く耕す 耕深は、5~10cmに浅く耕起

腐熟促進材の施用 わらゴールド 30kg/10a 鶏ちゃんパワー 30~45kg/10a 石灰窒素 20kg/10a

施肥

肥料設計 【特別栽培米】 p.5-6 【食農立国米】 p.11-12

※基肥 穂数および一穂粒数を確保するために、窒素成分で4~7kg/10a程度とする。

※追肥 幼穂形成期を重点とし、窒素成分で2kg/10a以内とする。

土づくり p.14-15 土づくりで気象変化に強い、安定した米作りを目指しましょう。稲体の強化と品質向上のためケイ酸肥料を重点に使用しましょう。(効果)①病虫害倒伏軽減、②根腐れ・秋落ち防止、③生育助長、④稲わら等の腐熟促進

◎病気かな?おかしいな?と思ったら、すぐにJAへご連絡ください。